

方丈記

鴨長明

ゆく河の流れは絶えずして、
しかももとの水にあらず。

よどみに浮かぶうたかたは、
かつ消え、かつ結びて、

久しくとどまりたるためなし。

世の中にある人とすみかと、
またかくのうとし。

(大意)

川の水はいつも流れている。
しかも、目の前を流れる水は、
いつもちがう水なのである。
水がたまっている場所に浮か
んでいる泡も、
あっちで消えたかと思うと、
こっちでできていて、
いつまでももとのままという
ものはない。
世の中の人や住み家を見ても、
やはり同じである。

作品を読んで感じたこと